

<物語の文章>

作品名：にいさんと妹

著者名：グリム ヤーコブ・ルートヴィッヒ・カール

グリム ヴィルヘルム・カール

にいさんが妹の手をとって、いいました。

「おかあさんが死んじゃってから、ぼくたちには、いいことって、ただの一時間もないねえ。こんどのおかあさんたら、まい日まい日、ぼくたちをぶつし、そばへいけば、足でけとばすんだもの。それに、ぼくたちの食べものといえは、食べのこしの、かたいパンのこぼだろう。テーブルの下にいる犬のほうが、ぼくたちよりやずつとましたよ。おかあさんは、ぼくたちにやくれなくったって、犬にや、ときどき、うまいものをほうってやってるもの。死んだおかあさんがこんなことを知ったら、それこそたいへんだよ。ね、ひろい世のなかへ、ぼくたちでていこうよ。」

ふたりは、一日じゅう、^{くさほら}草原や、畑や、石ころの上を歩いていきました。雨がふってきますと、小さい妹は、

「^{かみ}神さまと、あたしたちの心がいっしょになって、^な泣いてるのねえ。」

と、いいました。

日がくれるころ、ふたりはある大きな森のなかにはいりこみました。ふたりは、^{しんぱい}心配なのと、おなかがへったのと、長いあいだ歩いたのとで、すっかりくたびれていました。それで、とある木のうろのなかへはいりますと、すぐにねいってしまいました。

あくる朝、ふたりが目をさましたときには、お日さまはもう高くのぼっていて、木のうろのなかまで、かんかんさしこんでいました。そのとき、にいさんがいいま

した。

「ねえ、ぼくはのどがかわいちゃったよ。泉いづみのあるところがわかりや、いってのんでくるんだけどなあ。おやっ、なんだかさらさらいう水音がきこえるようだよ。」

にいさんは立ちあがって、妹の手をとりました。ふたりは泉をさがしにいこうというのです。

ところが、あのわるいまま母というのは、じつは、魔法まほうつか使いの女だったのです。ですから、ふたりの子どもがにげだしたことも、もうちゃんと知っていて、気がつかれないように、そうっとふたりのあとをつけてきていたのです。

魔法まほうつか使いの女というものは、みんな、そんなふうにならうと歩くものなのです。そして、この女は、森のなかの泉いづみという泉に、魔法をかけておいたのです。

ふたりは、小石の上まできらきらわきでている泉を見つけました。まず、にいさんがそれをのもうとしました。ところがそのとたんに、さらさらいっている水音のなかから、

わたしの水をのむものは トラになる

わたしの水をのむものは トラになる

という声が、妹の耳にきこえてきました。妹はあわててさけびました。

「おねがい、おにいさん。のんじゃいけないわ。のむと、おにいさんはおそろしいけどものになって、あたしを八つざきにしてしまうわ。」

にいさんは、のどがひどくかわいていましたけれども、がまんして、その水をのみませんでした。そして、こういいました。

「このつぎの泉いづみまで待つまちことにするよ。」

ふたりが二ばんめの泉にきますと、この泉も、

わたしの水をのむものは オオカミになる

わたしの水をのむものは オオカミになる

といているのが、妹の耳にきこえました。そこで、妹は、また大きな声でさげびました。

「おにいさん、おねがいだから、のまないで。のむと、おにいさんはオオカミになって、あたしを食べちゃうわ。」

にいさんは、その水をのまないでいました。そして、こういいました。

「このつぎの泉いづみにいくまで待つよ。だけど、こんどはおまえがなんていったって、のむからね。もう、のどがかわいてかわいて、たまらないんだ。」

やがて、ふたりは三ばんめの泉にきました。こんどもまた、妹の耳には、さらさらいう水音のなかから、

わたしの水をのむものは シカになる

わたしの水をのむものは シカになる

という声がきこえてきました。妹は大声にいいました。

「ああ、おにいさん、おねがいだから、のまないで。のむと、おにいさんはシカになって、にげていっちゃうわ。」

けれども、にいさんは、こんどはすぐにひざをつくと、かがみこんで、水をのみはじめました。水のしずくが、ほんのいくたらしか、にいさんのくちびるについたかと思うと、たちまち、にいさんは子ジカのすがたにかわってしまいました。

妹は、魔法まほうをかけられた、この気のどくなにいさんのことを思って、しくしく泣きだしました。子ジカも泣きながら、かなしそうに、妹のそばにすわっていました。とうとう、女の子はいいました。

「じっとしていらっしやいよ、子ジカちゃん。あたし、どんなことがあっても、あなたをすてやしなくってよ。」

女の子は、じぶんの釜きんのくつしたどめをはずして、それを子ジカの首のまわりにかけてやりました。それから、トウシングサをむしりにとって、それでやわらかいなわをあみしました。

女の子はそのなわで、かわいい子ジカをゆわえました。そして、子ジカをひっぱって、森のおくふかくへは行っていきました。

それから、ふたりはずいぶん長いこと歩きました。とうとう、ふたりは、一軒けんの小さな家のそばにきました。女の子がなかをのぞいてみますと、家のなかにはだれもおりません。それで、女の子は、

(このうちなら、いつまでも住んでいられるわ。)

と、思いました。

そこで、女の子は、子ジカのために、木の葉はやコケをさがしてきて、やわらかい寝床ねどこをこしらえてやりました。

女の子は、まい朝、そとへでていっては、草の根ねや、汗あせのおおい実みや、クルミのようにかたい実を、たくさんあつめてきました。それから、子ジカには、やわらかい草をいっしょにとってきてやりました。子ジカはその草を女の子の手から食べると、大よろこびで、女の子のまえであそびまわりました。

日がくれるころには、妹はすっかりくたびれて、おいのりをすませますと、すぐに、頭をかわいい子ジカの背中せなかにのせました。子ジカの背中が、ちょうどまくらになるのです。そして、妹はそのままやすやすとねいってしまうのでした。これで、もしにいさんが人間のすがたでいてくれさえすれば、どんなにかたのしい生活せいかつだったことでしょう。

こんなふうには、にいさんと妹とは、ずいぶん長いあいだ、この荒れ野あられののなかに、ふたりきりでくらしていました。

ところが、あるとき、この国の王さまが、この森のなかで大きな狩りかをもよおしたことがありました。角笛つのぶえのひびき、犬のほえ声、狩人かりゆうどたちのたのしそうなさけび声が、木ぎのあいだにひびきわたりました。

子ジカはそれをききますと、そこへいきたくてたまらなくなりました。

「ねえ、狩りかにやっておくれよ。」

と、子ジカは妹にいいました。

「もうとてもがまんができないんだ。」

こういって、子ジカはいつまでもいつまでもたのみましたので、とうとう、妹も承知^{しょうち}してしまいました。

「でもね。」

と、妹はいいました。

「夕がたには、きつとかえってきてよ。らんぼうな狩人^{かりゆうど}たちがはいつてこないように、あたし、戸をしめておくわ。だから、おにいさんだつてことがわかるように、戸をたたいて、妹や、いれておくれっていつてちょうだい。おにいさんがそういわなければ、戸はあけなくつてよ。」

子ジカは、そとへとびだしました。ひさしぶりに、ひろびろとしたところへでたものですから、子ジカはほんとうに気持ちがよく、うれしくつてたまりませんでした。

王さまと王さまの狩人^{かりゆうど}たちは、この美しい動物を見つけますと、すぐさまあとを追いかけてました。けれども、どうしても追いつくことができません。こんどこそだいじょうぶ、と思つたときには、子ジカはしげみをとびこして、どこかへすがたをけしてしまつていました。

あたりがくらくなつたころ、子ジカは家へかけもどつてきて、戸をたたいて、

「妹や、いれておくれ。」

と、いいました。

すると、すぐに戸があいて、子ジカはなかにとびこみました。そして、ひと晩^{ばん}じゅう、じぶんのやわらかい寝床^{ねどこ}のなかでゆっくりやすみました。

あくる朝になりますと、また狩りがはじまりました。子ジカは、ふたたび、角笛^{つのぶえ}のひびきや、ホウ、ホウという狩人^{かりゆうど}たちのかけ声を耳にしますと、じつとしていられなくなりました。そして、

「ねえ、おまえ、あけておくれよ。ぼくはもう、そとへでないじゃいられないんだ。」

と、妹にいいました。

妹は戸をあけてやって、こういきかせました。

「でも、^{ばん}晩にはきつとかえってきてよ。そうして、あの^{やくそく}約束のことばをいってね。」

王さまと王さまの^{かりゆうど}狩人たちは、またまた^{きん}金の^{くびわ}首輪をした子ジカを見かけますと、みんなであとを^お追いました。けれども、子ジカがあんまりはやくて、すばしこいので、どうすることもできませんでした。

一日じゅうこうやって追いまわしていましたが、日がくれてから、やっと、^{かりゆうど}狩人たちは子ジカをとりまくことができました。そして、狩人のひとりが、子ジカの足にちょっとした^{きず}傷をおわせましたので、子ジカは足をひきずりはじめました。そして、まえよりもかけかたがずっとおそくなりました。

そのおかげで、ひとりの^{かりゆうど}狩人が、子ジカのあとを、家までこっそりつけていくことができました。子ジカは家のまえまできますと、「妹や、いれておくれ」と、さげびました。そうすると、すぐに戸があいて、またもとのようにしめられました。狩人は、それをちゃんとじぶんの耳できき、じぶんの目で見とどけました。

狩人は、それをすっかりおぼえておいて、王さまのところへもどりました。そして、じぶんの見たことやきいたことを、のこらずお話ししました。すると、王さまは、「あす、もういちど^か狩りをすることにしよう。」

と、いいました。

ところで、妹は、子ジカがけがをしているのを見ますと、たいそうびっくりしました。それで、いそいで、子ジカの^ち血をあらいおとして、^{やくそう}薬草をはってやりました。そして、

「あなたのお^{ねどこ}寝床へいらっしゃい、子ジカちゃん。そうすりゃ、なおってよ。」

と、いいました。

けれども、けがはほんのかすり^{きず}傷でしたので、子ジカは朝になると、もうなんともなくなりました。そのうちに、^か狩りのさわぎがまたもやきこえてきますと、子ジカは

いいました。

「もう、がまんができない。ぼくはいかなくちゃならないんだ。そんなにあっさりつかまりやしないよ。」

すると、妹は泣くなく、いいました。

「こんどこそ、みんなに殺されちゃうわ。そしたら、あたしは、こんな森のなかでひとりぼっちになって、だあれもかまってくれる人がなくなっちゃうのよ。あたし、おにいさんをだすのは、いや。」

「それじゃ、ぼくはかなしくって、ここで死んでしまうよ。」

と、子ジカはこたえました。

「あの角笛をきくとね、いても立ってもいられないみたいなんだ。」

妹も、こういわれては、どうしようもありません。いやいやながら、戸をあけてやりました。すると、子ジカは元気よく、うれしそうに、森のなかへとびだしていきました。

王さまは、子ジカのすがたを見かけますと、狩人たちにいつけました。

「さあ、あれを、夜になるまで、一日じゅう追いかけるのだ。だが、傷をおわせてはならんぞ。」

お日さまがしずむのを待って、王さまはあの狩人にもうしました。

「さあ、いっしょにきて、わしにその森の小屋をおしえてくれ。」

王さまは小さな戸のまえにきますと、戸をたたいて、

「妹や、いれておくれ。」

と、大きな声でいいました。

すると、戸があきましたので、王さまはなかにはいりました。なかにはひとりの女の子が立っていました。ところが、その女の子の美しいことといたらびっくりするほどで、王さまも、いままでに、これほどきれいな子を見たことがありませんでした。

女の子は、子ジカではなくて、頭に釜のかんむりをかぶった男の人がはいってきた

ものですから、すっかりびっくりしてしまいました。けれども、王さまは女の子をやさしく見ながら、手をさしのべて、いいました。

「わしといっしょに城へ行って、妻になる気はないかな。」

「はい、そうさせていただきます。」

と、女の子はこたえました。

「ですが、子ジカもいっしょにつれていくのでなければ、いやでございます。あれをおいていくことはできません。」

すると、王さまがいいました。

「おまえの生きているかぎり、子ジカはおまえのそばにおくがよい。あれにもけっして不自由はさせぬ。」

そこへ、子ジカがとびこんできました。女の子は、またトウシングサのなわで子ジカをゆわえると、そのなわのはしをにぎって、子ジカをひっぱりながら、森の家からでていきました。

王さまは、この美しい女の子をじぶんの馬にのせて、お城へつれていきました。

お城では、目もさめるほどりっぱなご婚礼の式があげられました。こうして、女の子はいまではお妃さまになりました。

(略)

底 本：「グリム童話集 (1)」偕成社文庫、偕成社

1980 (昭和 55) 年 6 月 1 刷

2009 (平成 21) 年 6 月 49 刷

翻訳者：矢崎源九郎

入 力：sogo

校 正：チエコ

2021 年 3 月 27 日青空文庫作成